

分析報告書

ユーザー企業における FinOps 管理・最適化 ソリューション選択肢 分析報告書

4 モデル比較・TCO 分析・選定フレームワーク

作成者：ITAMS 株式会社 代表コンサルタント 武内烈
基準日：2026 年 8 月 9 日

Version 1.0

文書管理情報

項目	内容
文書名	ユーザー企業における FinOps 管理・最適化ソリューション選択肢 分析報告書
版数	Version 1.0
基準日	2026 年 8 月 9 日
作成者	ITAMS 株式会社 代表コンサルタント 武内烈
対象読者	CIO／CFO／情報システム部門責任者、FinOps・クラウドコスト管理の企画担当者、ITAM/SAM/VMO 担当者
目的	クラウド／SaaS の FinOps 管理・最適化を実現する 4 つのソリューションモデルを比較し、自社に適した選択基準と意思決定フローを提示する
適用範囲	パブリッククラウド（Azure／AWS／Google Cloud 等）および SaaS のコスト管理・最適化領域
除外事項	個別ベンダー製品の詳細な機能比較、個別契約条件の法的判断、特定ツールの導入作業そのもの

本書における位置づけ

本書は、VMAJ note 記事「FinOps 管理・最適化、『3 択』で本当に大丈夫か」の元となった分析を、より詳細な検討過程（機能レイヤー分解・モデル別 TCO 構成・具体的な意思決定ケース・選択フローチャート）まで含めて再構成した実務資料である。

目次

文書管理情報.....	2
本書における位置づけ	2
1. エグゼクティブサマリー.....	5
2. <i>FinOps</i> に必要となる基本機能	7
Layer 1：データ取得.....	7
Layer 2：外部データ補完	7
Layer 3：データ統合・正規化	7
Layer 4：分析.....	7
Layer 5：Optimization	7
Layer 6：意思決定	7
Layer 7：実行・Savings Realization	8
3. <i>Model A：Cloud Native 型</i>	9
長所	9
短所	9
適する企業	9
4. <i>Model B：AI/MCP 内製型</i>	10
想定アーキテクチャ	10
長所	11
短所	11
適する企業	11
5. <i>Model C：FinOps SaaS 型</i>	13
長所	13
短所	13
適する企業	13
6. <i>Model D：Managed FinOps 型</i>	15
最大の特徴	15
長所	15
短所	15

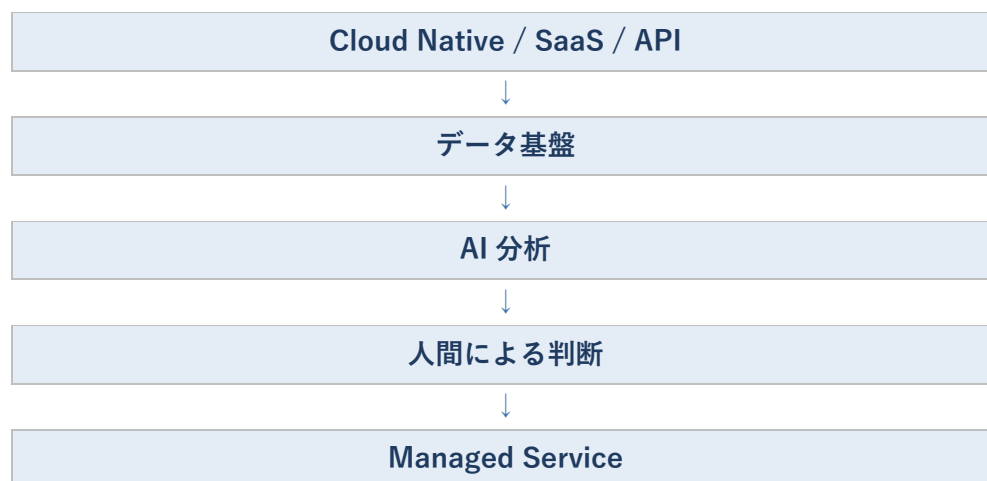
適する企業	15
7. 4 モデル比較.....	16
8. TCO で見ると評価は変わる	17
AI/MCP 内製型.....	17
SaaS 型.....	17
Managed FinOps 型	17
9. 最大の選択基準は <i>Cloud Spend</i> ではない	18
① Cloud 数.....	18
② SaaS 管理の必要性.....	18
③ 契約複雑性.....	18
④ 組織規模	18
⑤ 社内スキル	18
10. 選択 <i>Decision Matrix</i>	19
ケース 1：小～中規模・Single Cloud・FinOps 担当者あり	19
ケース 2：中～大規模・Multi-cloud・FinOps チームあり	19
ケース 3：AI/Data Engineering 能力が高い大企業	19
ケース 4：FinOps 人材不足の中堅企業	19
ケース 5：大企業・複雑な Multi-cloud/SaaS 環境	19
11. 推奨する選択フロー	20
Q1：FinOps 専任担当者を配置できるか？	20
Q2：FinOps プラットフォームを自社開発・維持する Data/AI/Cloud Engineering 能力があるか？	20
Q3：Single Cloud か？	20
Q4：年間の FinOps SaaS 費用より、内部運用工数削減+Savings 効果が大きいのか？	20
12. AI 時代における重要な構造変化.....	21
13. 最終結論.....	22

1. エグゼクティブサマリー

クラウドおよび SaaS の FinOps 管理・最適化を実現する方法は、大きく次の 4 モデルに分類できる。

モデル	概要
A. Cloud Native 型	Azure/AWS/GCP 等が標準提供する FinOps・Cost Management 機能を利用
B. AI/MCP 内製型	API、Export、MCP、AI Agent 等を組み合わせ、自社独自 FinOps 基盤を構築
C. FinOps SaaS 型	ServiceNow、Flexera、IBM Cloudability 等の FinOps 製品を導入し、自社で運用
D. Managed FinOps 型	FinOps サービスプロバイダ/MSP へ管理・分析・最適化業務を委託

実際の企業では、この 4 つから一つだけを選択するよりも、次の流れを組み合わせるハイブリッド型が重要になる。



特に生成 AI および MCP の発展により、従来は専用 FinOps SaaS でなければ実現が難しかったデータ収集・分析・レポート作成の一部を、API/MCP/AI Agent によって自社構築できる可能性が急速に高まっている。

一方で、FinOps の難しさは単なる「データ取得」ではない。最終的には、次の業務プロセスを継続的に運用する必要がある。

【現場メモ】

データ取得 → 正規化 → 契約情報補完 → コスト配賦 → 分析 → 最適化候補 → 優先順位付け → 承認 → 実行 → Savings 実現確認

したがって、ソリューション選定では「どの製品が高機能か」ではなく、**自社がどこまで FinOps Capability を保有し、どこから外部の製品・サービスに依存するか**を決定することが最も重要である。

2. FinOps に必要となる基本機能

FinOps 管理を実務として成立させるためには、少なくとも以下の 7 つのレイヤーが必要となる。

Layer 1：データ取得

クラウド/SaaS から、Cost、Usage、Billing、Resource、Subscription、License、Recommendation、Reservation / Savings Plan、Tag、Metrics 等を API、Export、Portal、MCP 等から取得する。

Layer 2：外部データ補完

クラウドサービスだけでは取得できない、契約条件、実契約単価、組織情報、Cost Center、Business Unit、Application / Service、Owner、Budget、CMDB、Business Criticality 等を追加する。

【現場メモ】

今回策定した Cloud FinOps Research methodology でも、顧客実単価等は Contract-Specific としてクラウドから自動取得できる情報とは明確に分離している。

Layer 3：データ統合・正規化

クラウド/SaaS ごとに異なるデータを共通モデルへ変換する。マルチクラウドでは FOCUS 等の標準モデルも重要となる。

Layer 4：分析

Cost Trend、Forecast、Budget Variance、Anomaly、Unit Economics、Allocation、Chargeback / Showback、Utilization 等を分析する。

Layer 5：Optimization

Rightsizing、Idle Resource、Commitment Optimization、License Reclamation、Reservation / Savings Plan、Storage Optimization、Architecture Optimization 等を分析する。

Layer 6：意思決定

単なる Potential Savings ではなく、Savings × Risk × Effort × Business Impact 等から施策の優先順位を決定する。

Layer 7 : 実行・Savings Realization

Recommendation を実際の Action へ変換し、次のように追跡する。



3. Model A : Cloud Native 型

Azure Cost Management、AWS、Google Cloud 等のクラウド事業者自身が提供する機能を中心に運用する方式である。例えば Microsoft では Cost Management に加え、FinOps hubs が高度な分析基盤として提供されている。

長所

- ・ 追加製品費を比較的抑えられる
- ・ クラウドとの親和性が高い
- ・ 最新クラウド機能への追従が速い
- ・ API/Export 等を利用できる
- ・ ベンダー公式データを直接扱える

短所

- ・ マルチクラウド統合が難しい
- ・ SaaS コストまで統合しにくい
- ・ 契約情報・CMDB・組織情報等は別途必要
- ・ FinOps 業務プロセスそのものは自社で構築する必要がある

適する企業

- ・ 単一クラウド中心
- ・ FinOps 担当者が存在
- ・ 比較的シンプルな環境
- ・ まず FinOps を低コストで開始したい企業

4. Model B : AI/MCP 内製型

これは今後特に重要になる新しい選択肢である。API、Export、MCP Server、AI Agent、データレイク等を組み合わせ、自社独自の FinOps システムを構築する。

【現場メモ】

今回の Azure FinOps 調査でも、Azure MCP Server、Azure Cost Skill、API、Export 等による Agent アクセスを独立したレイヤーとして検証している。

【注意】

重要なのは、MCP=FinOps システムそのものではないという点である。MCP は AI Agent がクラウド等の外部システムへアクセスするためのインターフェースであり、定期的な正本データ取得については API/Export 等と組み合わせる設計が望ましい。

想定アーキテクチャ



Savings Verification

長所

- 製品ライセンスへの依存を減らせる
- 自社業務に合わせて高度にカスタマイズ可能
- AI による分析・レポート自動化が可能
- SaaS、Cloud、契約、CMDB 等を横断できる
- ベンダーロックインを低減できる
- 将来的な AI Agent 進化の恩恵を受けやすい

短所

要求されるスキルが最も高い。必要になるのは FinOps 知識だけではない。

- Cloud Architecture
- API
- MCP
- IAM / RBAC
- Python / SQL 等
- Data Engineering
- FOCUS
- AI / LLM
- Security
- FinOps
- Cloud Licensing / Contract
- ITAM/SAM
- Governance

【注意】

「AI が Recommendation を出した」ことと「その Recommendation が正しい」ことは別問題である。したがって Evidence、Guardrail、Human Approval、Audit Trail が不可欠になる。

適する企業

- 大規模企業
- FinOps Center of Excellence を持つ
- AI/Data/Cloud Engineering 人材を持つ

- 独自業務要件が多い
- マルチクラウド+SaaSを統合したい
- 長期的に FinOps を競争力・社内 Capability として保有したい企業

5. Model C : FinOps SaaS 型

代表例として、ServiceNow Cloud Cost Management、Flexera One FinOps、IBM Cloudability 等がある。

ServiceNow Cloud Cost Management は、クラウド利用・支出の可視化、Cost Center や Business Service 等による分析、Optimization Recommendation、コスト削減タスクの自動化等を提供している。Flexera One はマルチクラウドのコストデータ取り込み、Allocation、Optimization、Commitment 等を提供し、ITAM/SAM/SaaS との統合を特徴としている。IBM Cloudability もクラウド支出の追跡、分析、最適化を中心とした FinOps プラットフォームである。

長所

- ・ 内製より短期間で導入可能
- ・ データモデルや Dashboard を自社開発する必要が少ない
- ・ FinOps ベストプラクティスが製品化されている
- ・ マルチクラウド対応が容易
- ・ Recommendation Engine を利用可能
- ・ 継続的な製品アップデートを受けられる

短所

- ・ ライセンスコスト
- ・ 導入・設定コスト
- ・ 製品管理者が必要
- ・ 自社固有データとの Integration が必要
- ・ 製品仕様への依存
- ・ Recommendation を実行する業務プロセスは依然として必要

【注意】

FinOps SaaS を買えば FinOps が完成するわけではない。製品は FinOps Capability の一部を提供するものであり、組織、責任者、承認、Remediation、Savings Verification 等は依然としてユーザー企業側に必要となる。

適する企業

- ・ 中～大規模企業
- ・ マルチクラウド環境
- ・ ServiceNow 等の既存プラットフォームを利用

- 自社開発を最小化したい
- 一定の FinOps 専門人材を保有している企業

6. Model D : Managed FinOps 型

FinOps サービスプロバイダ/MSP に運用を委託する方式である。サービスプロバイダが、データ収集、データ品質確認、Dashboard、Monthly Review、Optimization、Recommendation、Contract Data 補完、Reporting、Action Tracking、Savings Verification 等を提供する。

最大の特徴

ユーザー企業が購入するものが「Software」ではなく「FinOps Capability」になることである。

長所

- ・ 社内 FinOps 専門人材が少なくても導入可能
- ・ 初期投資を抑えやすい
- ・ 導入期間が短い
- ・ 継続的な分析を外部化できる
- ・ 専門家の知見を利用できる
- ・ Cloud だけでなく契約/SaaS/ITAM まで扱えるサービス設計が可能

短所

- ・ 継続的なサービス料金
- ・ サービスプロバイダへの依存
- ・ ノウハウが社内に蓄積されにくい
- ・ Provider の品質差が大きい
- ・ 顧客環境へのアクセス権管理が必要
- ・ 高度な自動化には追加 Integration が必要

適する企業

- ・ FinOps 専門人材を採用・育成したくない
- ・ FinOps 規模が専任チームを置くほど大きくない
- ・ 早期に成果を出したい
- ・ 定期的な Optimization を求める
- ・ SaaS/契約/Cloud をまとめて管理したい企業

7.4 モデル比較

評価項目	Cloud Native	AI/MCP 内製	FinOps SaaS	Managed FinOps
初期費用	◎	△	△	○
継続製品費	◎	○	△	—
人件費	△	×	△	◎
必要 FinOps スキル	高	非常に高	中～高	低～中
IT 開発スキル	中	非常に高	中	低
AI/MCP スキル	不要	高	低	不要
Data Engineering	中	高	低～中	低
導入速度	○	×	○	◎
カスタマイズ性	△	◎	○	○
Multi-cloud	△	◎	◎	◎
SaaS 統合	△	◎	○～◎	◎
契約情報統合	△	◎	○	◎
ベンダーロックイン	高	低	高	中
運用負荷	高	非常に高	中	低
社内ノウハウ蓄積	○	◎	○	△

◎＝非常に有利、○＝有利、△＝課題あり、×＝大きな課題

8. TCO で見ると評価は変わる

FinOps ソリューションを比較する場合、Software License だけで比較してはいけない。

AI/MCP 内製型

費目	内容
TCO 構成	AI 利用料 + Cloud/Data Platform + 開発人件費 + FinOps 担当者 + Data Engineer + Cloud Engineer + Security + Maintenance + AI/MCP 変更対応 + Audit/Quality Assurance
【注意】 「SaaS ライセンスが不要だから安い」とは限らない。特に FinOps Engineer/Data Engineer を複数名必要とする場合、人件費が最大コストになる可能性がある。	

SaaS 型

費目	内容
TCO 構成	Software License + Implementation + Integration + Administrator + FinOps Analyst + Training + Customization

ソフトウェア費は高くても、内製エンジニアリングを減らせるため、大規模環境では合理的になる場合がある。

Managed FinOps 型

費目	内容
TCO 構成	Managed Service Fee + 社内 Service Owner + データ提供作業 + Recommendation 承認/実行工数

専門人材を固定費として社内保有しないため、中規模以下では非常に合理的になる可能性がある。

9. 最大の選択基準は Cloud Spend ではない

一般的には「Cloud Spend が大きければ FinOps SaaS」と考えられがちだが、それだけでは不十分である。より重要なのは、FinOps Complexity である。以下の要素で判断すべきである。

① Cloud 数

Single Cloud → Cloud Native が有力 / Multi Cloud → SaaS / Managed / AI Platform が有力

② SaaS 管理の必要性

Cloud のみ → Cloud Native でも対応可能 / Cloud + M365 + ServiceNow + Salesforce 等 → SaaS/Managed/AI 統合型が有利

③ 契約複雑性

公開価格中心 → 自動化しやすい / EA/CSP/Private Pricing/Enterprise Agreement 等 → Contract Data 補完が重要

④ 組織規模

少数 Subscription → Cloud Native / 数百 Subscription/Account → SaaS/AI Platform

⑤ 社内スキル

FinOps/Data/AI 人材あり → AI/MCP 内製 / FinOps 人材あり、開発人材少 → SaaS / FinOps 人材自体が不足 → Managed FinOps

10. 選択 Decision Matrix

ケース 1：小～中規模・Single Cloud・FinOps 担当者あり

推奨：Cloud Native

最も費用対効果が高い。必要に応じて BI や簡単な AI 分析を追加する。

ケース 2：中～大規模・Multi-cloud・FinOps チームあり

推奨：FinOps SaaS

ServiceNow、Flexera、Cloudability 等を比較する。

特に既に ServiceNow を ITSM/ITAM/CMDB の System of Record として利用している企業では ServiceNow 型の戦略的価値が高くなる。

ケース 3：AI/Data Engineering 能力が高い大企業

推奨：AI/MCP 内製 + Cloud Native

最も高い柔軟性を実現できる。

ただし開発プロジェクトではなく、継続的な「FinOps Platform Product」として運営する必要がある。

ケース 4：FinOps 人材不足の中堅企業

推奨：Managed FinOps

Software を購入して自社で運用するより、FinOps Capability 自体をサービスとして購入する方が合理的である。

ケース 5：大企業・複雑な Multi-cloud/SaaS 環境

推奨：Hybrid

最終的には、Cloud Native + FinOps Platform + AI + Managed Service という組み合わせが最も現実的となる可能性が高い。

11. 推奨する選択フロー

最初に次の質問を行う。

Q1：FinOps 専任担当者を配置できるか？

- NO → Managed FinOps を第一候補
- YES → Q2 へ

Q2：FinOps プラットフォームを自社開発・維持する Data/AI/Cloud Engineering 能力があるか？

- YES → AI/MCP 内製を検討
- NO → Q3 へ

Q3：Single Cloud か？

- YES → Cloud Native を第一候補
- NO → Q4 へ

Q4：年間の FinOps SaaS 費用より、内部運用工数削減 + Savings 効果が大きいのか？

- YES → FinOps SaaS
- NO → Managed FinOps または Cloud Native + 限定的外部支援

12. AI 時代における重要な構造変化

従来の選択肢は、Build vs Buy であった。しかし AI/MCP 時代には、Build vs Buy vs Consume-as-a-Service となる。

さらに AI によって Build Cost が低下するため、「専用 FinOps SaaS を購入しなければ実現できなかった機能」と、「API/MCP/AI で容易に構築できる機能」を分離して評価する必要がある。

今後 FinOps SaaS に求められる価値は、単なる Dashboard ではなく、次のような領域へ移ると考えられる。

- 高品質な Data Model
- Multi-cloud Normalization
- Recommendation Engine
- Commitment Optimization
- Workflow
- Governance
- Automation
- ITAM/SAM Integration
- Savings Realization

13. 最終結論

ユーザー企業の FinOps 選択肢を単純化すると、①自分で作る ②ソフトウェアを買って自分で運用する ③専門家に運用してもらう、という3分類は基本的に正しい。

ただし「自分で作る」を、Cloud Native 利用と AI/MCP を利用した独自 FinOps Platform 構築に分離することで、実務上は4モデルとして考える方が正確である。

そして選択基準として最も重要なのは製品価格ではなく、次の問いである。

最重要の問い

FinOps Capability を社内資産として持つ必要があるか

FinOps を戦略的 Capability と考える企業は AI/MCP 内製または SaaS + 内製チームが適する。

FinOps を必要な管理機能ではあるが自社の競争優位とは考えない企業では Managed FinOps の経済合理性が高い。

また、大規模企業では完全な一択ではなく、次のようなハイブリッドモデルが、今後の有力なターゲットアーキテクチャになると考えられる。

【現場メモ】

System of Record は Cloud/SaaS、データ統合は FinOps Platform、分析は AI、判断は人間、運用の一部は Service Provider

したがって FinOps ソリューション選定では、製品比較から開始するのではなく、次の順序で意思決定することを推奨する。

